

## 萩原先生を偲んで

藤田 良雄

先生が数千ページにわたる英文5巻の“天体力学”の大著を完了され、この業績に対し昭和50年度朝日賞を受けられたが、受賞式当日お風邪のため出席が不能となり、私は急遽代理として出席し他の受賞者や来賓を交えた祝賀パーティでお祝いのスピーチをさせていただいたのは昭和51年の1月16日であった。そのスピーチをもとにして本誌\*に一文をのせ先生が御健康で御研究が更に発展するようにと結んだのであったが、それから3年もたたないうちに、先生は帰らぬ旅につかれ、先生を偲ぶ言葉を綴らねばならぬようになったことは、まことに悲しいことである。

先生は学者が自分の研究を続けるために、どのように身体の健康を保持すべきかを身をもって示されたと云えるであろう。そのことは晩年において膨大な天体力学の著作を完成されたことや、逝去の直前まで天文学の新しい問題に興味を持たれ特に中性子星やブラックホールの論文を読んで居られたことでも明らかである。そのため身体については殊に注意された。大分前にはなるが、ある日尿に血が混って居ることに気がつかれた時、早速診察を受けられたら手術をした方がよからうとの話に驚かれ、どうしたらいいだろうと私に相談があった。私は先生が注射や手術を殊の外おきらいなことを知っている、私の一高時代以来の友人である落合君（現埼玉医科大学学長）に話したら早速拝見したいとのことで、診察の結果同君は手術の必要はないという結論を下し、適切な処置をして下さった。その後全く異状なく順調で落合君とクラス会で会うと、いつも心配ないよと云っていたことを思い出すのである。数年前にレントゲンで胃にかけがあることを知られ、先生はいろいろ面倒な検査を受けられた。この時なども、よく我慢されたと内心驚ろいていたが、医者に対しては先生はほんとうに優等生だったと云えよう。医者への云通りに養生されたのである。これも大したことなく順調に回復されたのであった。奥様から伺ったのであるが、体操と散歩はかかされたことがなかったということである。先生は頭脳の働きのすぐれていると共に連動神経もずいぶんすぐれて居られたように思う。日本舞踊で正式にお師匠さんにつかれ、発表会で成果を時々示された。残念ながら私は直接拝見できなかったが、衣裳をつけて撮られた写真を持っている。昭和42年チェコスロバキアのプラグで国際天文学連合の第13回総会が開かれた時のことである。最終日のクローズング・ディナーの後で各国の出席者が美しい音

楽に刺激されたのか、テーブルから立ちあがり、リズムに乗ってダンス・パーティの形になった。無能？な連中（私も含めて）はテーブルのまわりに腰を下したままだったが、腕に覚えのある学者は立ち上り踊り始めた。私は誰だったか覚えていないが、女性の天文学者と先生が軽やかにステップを踏んで居られるに気がつき、驚ろくと共に成る程とも思って、感慨一入であったことをありありと思い浮べる。

先生の御専門である天体力学については私は全く語る資格はないし、一時エネルギーを注がれた惑星状星雲の電子速度分布やふく射の伝達についての物理機構に関する理論的研究についても直接タッチしたわけではなく只弥次馬的であって、只一度だけ論文の図を何枚か書かせていただいたことがあった。直接、計算のお手伝いをしたのは故畑中さん外当時の学生が何人かであった。未だ日本天文学会の欧文報告は出版されていない頃で、日本学術研究会議の“日本天文学及び地球物理学輯報”が主な発表機関であった。当時のその雑誌を見ると殆んど毎号に先生の論文がのって居り、共著者の中に多彩な顔ぶれを発見するのは興味深い。例えば水沢の坪川君もお手伝いした一人であったことなどが改めて思い出されるのである。

終戦後新しく発足した日本学術会議の下に電離層研究特別委員会、天文学研究連絡委員会、日食研究連絡委員会が生れ、先生はそれらの委員長を引き受けられた。私はそのうちの、天文学と日食の研連委の幹事を仰せつかり先生がおやめになるまでお手伝いさせていただいた。その中で、昭和23年5月9日の北海道礼文島における金環食は日食研連委であつかった最初のビッグ・イベントであった。終戦後間もない頃で、我々科学者は打ちひしがれていた時だっただけに、これは特筆すべき事件であった。未だ何ら積極的な行動をおこし得ない我々にとって、先生がアメリカ駐留軍の諒解の下に進められた観測計画は一般の人々をも含めて一服の清涼剤であった。“サンデー毎日”の表紙に黒い太陽をバックにした先生の顔のクローズ・アップが見事に描かれていたのはそのあらわれだったと思う。同年3月27日、4月22日、4月26日、アメリカ駐留軍に許可された東京札幌間直通急行列車が夜10時45分、観測隊のメンバーを乗せて東京駅を出発した。先生と私はその度に8時半頃から東京駅のプラット・フォームで、英文の参加者リストをもったアメリカ軍の将校と落ち合い、リストで乗車する科学者の名前をいちいちチェックするのに立ち合った。そし

\* 天文月報（昭和51年）69巻、142頁

て5月2日には最後の列車として日本観測隊長である先生自身を乗せた急行が矢張10時45分出発したのであった(観測隊はアメリカからも参加した)。先生をお見送りしながら、これまでに漕ぎつけた先生の御苦勞を思った。GHQ(総司令部)との交渉は観測器械のLST(上陸用舟艇)による輸送をも含めてほんとうに大変な仕事だったのである。

日食についてはもう一つの思い出がある。昭和33年10月12日の皆既日食は南太平洋でおこり、そのために観測隊の輸送が必要であった。それに適当な船がないのである。先生はそれに大へん苦勞された。いろいろと交渉された結果、北大の水産学部の練習船“おしよ丸”(590トン)に内定した。先生の命を受けて、私は最後の交渉に札幌へ出かけた時は、ほんとうにホッとした気持であった。しかし先生も私もおしよ丸が観測隊を乗せて観測地であるスワロフ島に向い、又終って芝浦に無事戻ってくるまでは気が気ではなかった。

天文学研連で提出をきめた74吋反射望遠鏡設置の件も先生の並々ならぬ努力とねばり強さが遺憾なく発揮されたものといえよう。その結果は岡山天体物理観測所となって立派に完成し、現在までに多くの業績があげられていることは周知の事実である。

先生の天体力学への顕著な貢献に対し先生の傘寿(80才)を祝して昨年5月23日から26日まで東京で開かれた国際天文学連合シンポジウムNo.81“太陽系の力学”で講演された“天体力学の現況”(Present Status of Celestial Mechanics)という主題の先生の英文の原稿を見ながら、私は半世紀以上日本の天文学界の輝ける巨星であった先生を失った深い悲しみに打ちひしがれている。しかし私たちは先生の遺業を受けついで何とか未来への希望をつながなければならぬ。そして天文学への何らかの寄与をすることができたなら、天上にある先生の御心も安らぐであろう。

## 萩原雄祐先生を悼む

海野和三郎

萩原先生は1月29日朝全く突然天国へ旅立たれてしまった。私も偶然同行したが、理学部3号館の階段を談笑しながら上って行かれたのはついその2、3日前のことであった。そのときは、お元氣な声を聞きつけて、本木さんがうれしそうに階段のところまでお出迎えしたほどであった。先生の生涯は最後まで天文学のために修羅をもやした壮烈なものであったといえる。

先生の功績は、天体力学および天体物理学の理論的研究、後進の教育指導、東京天文台を中心とした本格的な観測施設の建設である。そのいずれに最も貢献が大きいかは人によって評価がちがうが、これらすべてに比類ない大きな足跡を残されたことは万人の等しく認めるところであろう。わが国の天文学が世界的なレベルに達し得たのは先生の御努力によるところ絶大である。

戦時中火災にあった東京天文台で、敗戦の沈滞を打破り、それこそ八面六臂の活躍で復興をなし遂げたのは先生であった。そのためには、戦争には敗けたが学問では敗けなかったという先生の自信がものをいった。惑星状星雲の研究は、畑中さんらの協力もあったが、メンゼルの研究に対し遜色のないものであった。また、惑星状星雲内の電子速度分布の歴大な研究は野心的な基礎研究であり、解析的な方法は先生の実力の一端を示すものであった。惜しいことに、見込みちがいがあり、結果はあまり面白くならなかったが、今にして思えば、銀河系の恒星速度分布にでも適用していればよい結果が出たこ

とであろうと惜しまれる。いずれにしても、わが国に本格的な天体物理学を植えつけたのは萩原先生であり、それにつづいてわが国の天体物理学の基礎がかたまってきたものと私は考えている。

先生はその知識欲と理解力で天才であった。万卷の書と論文を読みこなし、数学と物理学の先端にも通じておられた。著名な外国の天文学者も、先生からみると、こんなことも知らないということになった。これは先生の長所でもあり欠点でもあった。その学識からくる自信と知名度とプラスアルファを先生は天文台の復興にことごとく利用した。先生は、日本は欧米とかなえの三脚であると唱えた。御前講義にも職を賭してそのようなことを直訴したというのが先生の御自慢であった。一寸、時代がかっている気はしたが、とにかくその迫力で、乗鞍コロナ観測所、岡山の74インチ、堂平観測所などを獲得した。近年完成した木曾のシュミット望遠鏡なども当初からの計画の延長である。これだけのワンマン的活躍のできる人は今後再びあらわれることはないように思われる。

私が天文学科に入学したのは昭和19年10月、戦況も次第に不利になりつつある頃であった。先生は戦時研究としてマグネトロンの研究をされたのもその頃であったであろう。マグネトロンの発信機構をヒルの方程式で論じた先生の論文がある。中期(2年生)となって、石田、大脇などの諸君と共に私も萩原先生の講義を聞くように